

IV. 研究協議会参加者

211名(講演会のみ参加の父兄200名を除く)

	国語	社会	数学	理科	英語	保健体育	その他	計
講演会							1	1
来賓							2	2
助言者	2	1	1	1	1	1		7
招待者	4	1	4	4	4	4		21
一般参加者	32	20	29	12	34	4		131
学生	7	6	0	0	2	0		15
本校教官	5	5	5	5	5	5	4	34
計	50	33	39	22	46	14	7	211

〔Ⅱ〕本校の研究の歩みについて

研究部長 都築 亨

今回の研究協議会のテーマは「学習意欲を高めるための自己表現力の育成」となっているが、最初にその意味と今までの本校の研究の歩みについて御報告したい。

本校では1年おきに研究協議会を行っており、前々回59年には教科ごとの研究協議会で「学習意欲を高めるための教育方法の改善」のテーマで、一昨年の研究協議会では中学・高校の教育の諸問題について「学習意欲・生活意欲を高めるために」のテーマで

- (1)授業、(2)生徒指導、(3)TM・マイコン、
(4)総合学習

というそれぞれの教科を超えた観点からの研究協議会を行ってきた。

したがって、この数年間「学習意欲」ないしは「学習への動機づけ」を問題にしてきたことになる。それはこのごろ、生徒たちの学習、さらには学校生活全般に対する構えがいかにも消極的で「無気力、無関心」といった状況が目だってきたからである。これはいろいろな研究会その他の場で指摘されていることだし、附属連盟の研究協議会での他の付属高校などでさえそうした発表があったが、そうしたエリート校と違い、本校の場合中学はほぼ完全抽選で、高校へもほとんど進学出来るわけだが、その条件が裏目に出て、のんびり出来ることが学習意欲の欠如につながる点もあって、特にこれを何とか克服したいという切実な願いがわれわれの問題意識の発端にある。

この研究協議会では「学習意欲を高めるための自己

表現力の育成」というやや意味不明なテーマを掲げたが、一つには今までの流れの中で、学習意欲を持たせるのにはどんな方法があるのかを模索する中で、授業ではうつむいていて終始「受け身」の姿勢が続いていた生徒が合唱コンクールとか演劇などの場面で本当に生き生きとやっているのを見ると、そうした主体的な活動ができるのは何らかの意味で自分がその活動に参加でき、「自分」が表現出来る場面がある。だからスポーツが得意な子供たちが陸上競技会などの場で活躍出来るように、学校祭や運動などの場面で何らかの表現の場が与えられ、各教科の授業でもどこかにそうした「自己表現」の場が必要ではないだろうかと考えたからである。

それがないと生徒たちは趣味活動やファッション、極端な場合は規則を破るという具体的行動で「自己」を表現しようとする。それはそれでその表現を教師がうけとめ、指導のキッカケになるが、それとともに、その表現が出来る場を教科の授業の中で確保することが大切であろう。

私達がこの研究協議会に備えて学部の今津先生、速水先生にお話を伺った校内の研究会では、このテーマの意味は分かるとしても、研究協議会のテーマとしてはむしろこの関係は逆ではないか、「学習意欲を高める」ことによって、目的としての「自己表現」が可能になるのではないかとか、また、ある教科からの発言では自分の科は自己表現とは無縁であるとの指摘もあったが、大きな目で見ても「生徒の主体的学習態度の育成」という観点は大切なことで、学習の動機づけという意味で身近な所から生徒の関心を引き起こすということも必要だし、「社会見学」とか「研究旅行」を教

育課程に位置づけてそのテーマ設定などを通じて自分自分を学習場面に参加させ、発表の場をつくることも考えてしかるべきことであろう。

このごろ、本校としてはいろいろの行事を通じて生徒の「発表」「自己表現」の場を提供し、その組織化、系統化をはかりたいと考えているが、今回は特にこれを教科の授業の中でどのように受け止めたらいかがを考えていると思う。

最近の傾向としてこの「表現」ということは、例えば国語で『国語表現』として1科目に位置づけられたり、英語では英文解釈だけではなくスピーチなどが重視されるという形では表われているが、数学などで何が自己表現なのか、とてもこの主題にはついていけないというような論議もあった。しかし、今日の数学分科会ではそれなりに我々の見解を示したつもりである。

したがって、各分科会のテーマがある分科会では「自己表現力」の主題にストレートにつなげ、ある分科会では「学習意欲を高める」という今までの問題意識の継続で、さらにある分科会ではそのもとになる「身近な領域への問題意識や身近な所から生徒の関心を」という観点で、いくつかの試みを報告するなど、かなりアンバランスが目立っている。

それでもいいのではないかというのがこの研究協議会に臨む我々の基本的態度である。本日の授業にも必ずしもこの「表現」が生かされていないかも知れない。

今までの校内の論議の中で、生徒の表現力は教師の自己表現の如何によるのではないかと、生徒が自己を埋没させ、授業にも生徒会活動にも消極的になるのはそれは教師の問題であるという側面も意識してかかなければならぬという指摘もあった。

本日の研究協議会ではなるべく本校の教師の発表—自己表現は抑えて大方の御来会の先生がたの意欲的な御発言、自己表現を期待する。

〔Ⅲ〕分科会の概要

※出席者数は助言者、本校教官を除く。

1. 国語分科会 出席者数 午前32名、午後27名

①長谷川弘“中学における表現指導の可能性と実践”

・質問「卒業論文を書かせた後の評価をどうするか。また制度化には問題点が多くあると思われるが」(不破高校 加藤先生)

答え「中3において目的意識を持つことは学習意欲につながることだ」(本校 米山)

②高木 徹“高校「国語表現」の実践報告”

・質問「作文をいかに評価するか」(豊野高校 浅井先生)

答え「何故作文をいやがるか？」

1. 技術を優先し過ぎ

2. 倫理主義(世の中で認められる内容を書かなくてはならない)

3. 課題主義(読書感想文)

4. 名文崇拜主義

純粋文章(その子でなくては書けない文章)を書こう。表現の現場を保証する。教室で考える時間を身体の中にする。価値の比較は出来ないのでは?例えば一読者としての自分が評価する観点は、思わず引き込まれる訴えのある文章かどうか。また、他教科の評価をも揺さぶることが出来る。(助言者 小牧工業高等学校梅田先生)

・質問「就職試験や受験の場で要求される作文能力、技術とのズレはどうするのか」

答え「工業に来る生徒にどう教えるかと言うぎりの所で、このような表現の授業が誕生した。人間と表現について考える=本物であれば就職試験でも応用がきく。年間計画の中で、9月には試験対策として作文(①高校生活を振り返ること、②世の中へ出てからの心構え)を提出させる。」

③公開授業(中2童話、高3スピーチ)について

・質問「生徒が積極的に進めている授業で、中高一貫の賜か。しかし県立では出来ないのでは」(蟹江高校 川北先生)

答え「作文で書くことに抵抗がある生徒もスピーチには充実感があるので、意欲的に取り組む。」(記録 斉藤)

2. 社会科分科会 出席者数 午前20名、午後17名

①田中裕巳“中1野外学習の実践報告”

・質問「研究集録を作る段階で、生徒間の報告内容の落差をどう埋めたのか」(助言者 日比先生)

答え「班内の係分担——特に記録係とか副班長に対して、役割として指導」

・質問「費用の上で問題はなかったか。」(司会 都築)

答え「地下鉄・市バスの一日乗車券を使った。」

・質問「果して大規模校でも実施できるだろうか。」(敦賀市立松陵中 稲倉先生)

答え「担任団の協力を得て学年行事として取り組んでいる学校がある。」

・質問「歴史学習の進捗との関係は?」

答え「これから学ぶ領域の見学先が多かった。」

・質問「班別テーマは指導修正したのか。安易な方向はなかったか。」(敦賀市立松陵中 大竹先生)

答え「男女で対立したりいろいろあった。この年度は教師で大分調整をした。」